

ジャーナリストとしてのクライスト

——名詞文体を中心に¹⁾——

廣 川 智 貴

1. はじめに

ハインリヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) は、作品の内容のみならず、その形式の点からみてもドイツ文学史上に固有の地位を占める作家である。クライストはとりわけ他に類をみない文体によって知られているが、その特徴は長く複雑な文にあるとあってよい。挿入が幾度となく繰り返された長文は、今にも崩れ落ちそうな観を呈し、読者に緊張を強いる。

このような挿入文を駆使した複雑な文こそ、おおくの読者が抱くクライストの文体の印象であるにちがいない。じっさい、クライストはそのようないわゆる動詞文体のすぐれた書き手であるとみなされることがしばしばなのである²⁾。クライストのテキストを読む者のほとんどが、この作家の文構造の複雑さに飲み込まれ、それと同時に対象を現前化せしめる文体の力に驚くだろう。しかし、このような複雑な文構造を指摘するだけではクライストの文体をあきらかにすることはできない。興味ぶかいのは、この作家がこのような文体とはまったく異なる書き方で記したテキストも存在するという点なのである。すなわち、ジャーナリストとしてのクライストが残した文章がそれである。クライストは作家であると同時に数々の新聞・雑誌の編集にたずさわるジャーナリストでもあった。そして、これらに発表された文章がわれわれ読者にあたえる印象は、

彼が小説として発表した、いわゆる文学的テキストからうけるそれとは異なるようにおもわれる。

この印象の相違を生んでいる原因のひとつとして名詞文体の使用をあげることができる。この文体の本質は「表現の簡潔さ、あるいは別の言い方をすれば、できるかぎりわずかの語によって、できるかぎり多くの情報をあたえること³⁾」にある。これは一般にクライストの文体の特徴とされる複雑な長文とは対照的な形式であるといえよう。したがって、クライストの名詞文体について考察することは、この作家の文体のあらたな一側面を示すことにつながるだろう。

本稿の意図は、あまりかえりみられることのないジャーナリストとしてのクライストを概観し、現代ドイツ語の一傾向である名詞文体がクライストの記事にもみられることを指摘し、その文体の性質を考察することにある。その際の力点は、文体の機能的側面の記述というよりはむしろ、それが読者にたいして与える効果⁴⁾におかれる。

2. ジャーナリストとしてのクライスト

今日ではクライストは古典主義にもロマン派にも属さない孤高の作家として高く評価され、彼の文学的テキストが研究の中心となっている。しかし、クライストは作家であると同時に初めての日刊新聞を編集、執筆したジャーナリストでもあった。にもかかわらず、ジャーナリストとしてのクライストは、これまでほとんど言及されることがなかった。だが、文体という問題に焦点をあてるばあい、作家としてのクライストのみならず、ジャーナリストとしてのクライストをも考慮しなければならないだろう。なぜなら、今さらビュフォンの「文は人なり」というあまりにも有名になりすぎた格言を引用するまでもなく、文学作品であろうとジャーナリズムの記事であろうと、クライストという類い希なひとりの書き手が、読者にたいしてある意図をもって文を綴ったことになら変わりはなく、その文体にもこの作家の刻印が押されているからである。

ただ、ジャーナリストとしてのクライストが論じられることはあまりないので、まずは彼がどのようなジャーナリストであったのかを瞥見し、本稿で使用するコーパスを明確にしておきたい。

クライストは生前三つの雑誌、あるいは、新聞の編集に携わっている。すなわち、「フェーブス」(Phöbus, 1808)、「ゲルマニア」(Germania, 1809)、「ベルリント刊新聞」(Berliner Abendblätter, 1810/11)がそれである。だが、クライストがあくまでもジャーナリストとして編集したのは「ベルリント刊新聞」のみであった⁵⁾といってよい。ジャーナリストといってもさまざまであるが、ここでいうジャーナリストとは、読者に客観的な情報を提供し、政治的事柄に冷静なコメントを加える書き手をさす。

「フェーブス」はなによりもアダム・ミュラーとの共同編集であり、クライストの芸術観はミュラーにおおいに影響されるところがあり、そこに発表していたのも文学作品がおおく、いわゆるジャーナリスティックな文章を草したとは言い難い。つまり、クライストにとっての「フェーブス」の意味とは、なによりも自作を発表する場を確保することにあつたのである。

「フェーブス」に続いて、クライストは週刊誌「ゲルマニア」の編集をおこなうことになる。「フェーブス」が芸術に重きをおいていたとすれば、「ゲルマニア」は政治的プロパガンダを中心にしていた⁶⁾といってよい。クライストを「フェーブス」から「ゲルマニア」へと至らしめた要因には当時の政治的状況が関係しており、これはこれで非常に興味ぶかい問題ではあるが本稿の範囲をこえるものである。したがって、ここでは「ゲルマニア」の性質に簡単に触れるにとどめておきたい⁶⁾。クライスト自身のことばをかりて「ゲルマニア」の意図を一言でいえば、この雑誌が対ナポレオン戦争の戦場での「ファンファーレ」となり、ドイツの運命の方向転換をはかり、同時代人を反抗的精神へと駆り立てることであつた。さらにいえば、ここでのクライストの試みは、アクチュアルな政治的出来事⁷⁾を伝統的な文学的ジャンルと結びつけ、思想的内容に説得力をもたせることであつた。要するに、「ゲルマニア」におけるクライスト

も上述の意味でのジャーナリストではなかったといえる。時勢と密接に関係した「ゲルマニア」において、クライストは冷静な態度をとることができなかったのである。

これらの雑誌と比較すると、「ベルリント刊新聞」は客観的な記事を比較的小おく掲載していたといえる。これには当時の出版状況が関与していたのかもしれない。このベルリンで初めての日刊新聞が刊行された当時、プロイセンにおける出版をめぐる状況はきびしく、とりわけ政治に関する記事には検閲の目が集中して注がれていた。クライストは「ベルリント刊新聞」を「娯楽紙」(Unterhaltungsblatt)とよぶことで検閲を回避したが、むろん新聞の内容は娯楽に関する記事のみではなかった。刊行当初はクライストも沈黙をまもり、小品や当時これなしでは新聞が成立しないといわれた劇場批評を中心としていたが、しだいに政治に関する記事も掲載しはじめることになる。いずれにせよ重要なのは、この新聞においては、政治的なものから日常的なものに至るまでのさまざまな出来事が比較的冷静な筆致で記述されており、その意味でジャーナリストとしてのクライストの手腕が上述した雑誌よりも発揮されているということである。ジャーナリズムの言語と名詞文体は密接な関係にある。それゆえに「ベルリント刊新聞」は名詞文体を考察するのに適したコーパスであるといえよう。そこで以下においては「ベルリント刊新聞」にみられる出来事の記述を分析の対象としたい。

3. 現代ドイツ語における名詞文体

クライストの文体を考察するまえに、現代ドイツ語学の成果をみることにしたい。なるほど、クライストが記事を執筆したのは19世紀の初頭であったが、⁹⁾情報を凝縮して提示する名詞文体はまさに現代ドイツ語を象徴するものであり、現代ドイツ語の名詞文体に関する成果を概観することは、クライストの文体を考察するのに有益であるようにおもわれるからである。

現代ドイツ語は、文構造が難から易へと変化する傾向にある。ドイツ語の文形式は一般につきのように分類することができる。¹⁰⁾すなわち、「文相当句」(Setzung)、「単一文」(Einfachsatz)、「対結文」(Satzreihe)、「従属的複合文」(Satzgefüge)がそれである。「文相当句」は文法的には不十分な文で、とりわけ主語や述語といったようないわば文を構成するに際して重要な要素が欠けているものである(Überall Staus, Selbstverständlich, Kein Problem! u.s.w.)。「単一文」とは一個の主文からなり、副文や文に相当する不定詞をもたないものをさす(Bielefeld mauert in Köln, Auf einem Traktor mit Baggerschaufel preschte ein ,DDR'-Flüchtling gestern nachmittag bis kurz vor den Metallgitterzaun mit den Selbstschußanlagen)。「対結文」は文法的に完全な主文が2個、あるいは、それ以上並列したものである(60 Personen wurden festgenommen, gegen 22 wurden Haftbefehle erlassen)。最後の「従属的複合文」は、主文のほかにすくなくとも一個の副文または文相当の不定詞句をふくむものである。これらの文形式をもとにして現代のドイツ語と18世紀のドイツ語とを比較すると、「従属的複合文」の後退と「単一文」のきわだった増加が目立つ。¹¹⁾このような従属文の割合の後退には文構造内部の変化が、具体的には名詞文体がおおいに関与している。¹²⁾名詞文体といってもその機能はさまざまであるが、以下ではとりわけクライストの文体の特徴をあきらかにするのに意義があるとおもわれるもの、すなわち、名詞文体のブロック構成と副文の代用としての名詞表現を中心に言及したい。

名詞文体は主として動詞や形容詞を名詞化することで成立する。動詞あるいは形容詞の名詞化の手段としては、(1)動詞+ung、(2)動詞+en(=不定詞)、(3)動詞からの派生語、(4)形容詞からの派生語といった形式をあげることができ¹³⁾る。このような形式によりドイツ語は名詞文体を形成するのであるが、その際に大きな役割を果たすのが「ブロック構成」(Blockbildung)である。¹⁴⁾ブロック構成とはさまざまな手段により名詞化されたものを拡張することである。具体的には、ブロック構成は属格(die Beschäftigten der Metallindustrie)、前置詞句(der Tarifvertrag für die Metallarbeiter)、あるいは分詞(ein am Produktionszu-

wachs orientiertes Angebot) などによって多数の名詞を結合し、それを一個の文成分へと作り上げることで成立する。その結果、名詞句は文相当の指示と陳述をもつことが可能となる。あとでみるように、クライストの名詞文体にあっては、このブロック構成の性質がおおきな意味をもつ。

ブロック構成と並んで重要なのは、副文の代用としての名詞文体である。H・J・ヘリンガーは、名詞化された句を解釈するには、その句が文中においていかなる機能をもつかに注意しなければならない、と指摘している¹⁵⁾。以下ではヘリンガーの例を参考にして、具体的に副文の代用としての名詞文体の意味的性質をみてみたい。

補足語 (Komplemente) として名詞化されたものは、daßによる副文、あるいは zu 不定詞句に書き換えることができる。

Im Mittelpunkt steht die Schaffung einer krisenfesten Ausbildung.

... daß man eine krisenfeste Ausbildung schafft.

... eine krisenfeste Ausbildung zu schaffen.

クライストの文体にとり重要なのは、補充語 (Supplemente) として名詞化されるばあいである。これは前置詞句のかたちであらわれ、従属接続詞をもちいた文に書き換えることができる。

Wegen der Neugestaltung

Weil man neu gestaltet hat / neu gestalten will ...

Durch die Neugestaltung hat sich die Lage verbessert.

Weil man neu gestaltet hat, ...

Aufgrund der Neugestaltung

Weil man neu gestaltet hat, ...

Infolge der Neugestaltung

Weil man neu gestaltet hat, ...

Dank der Neugestaltung

Weil man neu gestaltet hat, ...

これらの例では、さまざまな前置詞句がひとつの従属接続詞 ,weil‘ によって書き換えられている。むろん、因由をあらわす前置詞にはそれぞれ異なったニュアンスがあり、それを十把一絡げにすることには問題がある。たとえば、同じ因由をしめす前置詞であっても、 ,dank‘ は肯定的な意味を包含するし、 ,infolge‘ は結果をあらわすが、意図的ではないという性質をもつ。ここでは意味的な相違は従属接続詞の場合よりも前置詞の方が多様であるということ、そして従属接続詞による副文が前置詞句にとって代わることがあるということだけを確認しておきたい。ここでは従属接続詞 ,weil‘ による書きかえのみを例としてあげたが、あとでみるように、名詞化をふくむ前置詞句が、時、制限、付帯状況などをあらわす副文の代用となることもある。

以上、現代ドイツ語は難から易への傾向があり、それに名詞文体が関与していることを指摘し、名詞文体の性質のうちでもクライストの文体分析にとり必要なもの、すなわちブロック構成と副文の代用としての名詞文体を概観した。これらのことを前提にして、以下では具体的にクライストの文体に迫ってみたい。

4. クライストの名詞文体

4. 1 「小作農制度の廃止について」

まずわれわれは小さな記事を手がかりにしてクライストの名詞文体に接近することにしよう。「小作農制度の廃止について」(Über die Aufhebung des laßbäuerlichen Verhältnisses)と題する全集版にしておよそ一ページの記事がある。これは1810年12月29日の「ベルリント刊新聞」(Bl. 76)に掲載されたものである。H・ゼムトナーによると、「贅沢税について」(Über die Luxussteuern), 「政府の財政政策について」(Über die Finanzmaßregeln der Regierung)とならんで、政府の政策にたいして友好的な立場をとる評論に属する¹⁶⁾。この記事では以下のようなジャーナリズムに特有の文を確認することができる。

*Jede Beschränkung der Freiheit hat die notwendige Folge, daß der Beschränkte dadurch in eine Art von Unmündigkeit tritt.*¹⁷⁾ (507)

自由の制限というものは、どのような場合でも、制限された者が一種の未成年の立場になるという結果を必ずひきおこす。¹⁸⁾

Vielmehr durch die lange Dauer einer solchen Beschränkung kann der Mensch so zurückkommen, daß er gänzlich die Fähigkeit dazu einbüßt, und sich *durch Aufhebung des Zwanges* weit unglücklicher fühlt, als durch den Zwang selbst. (507)

むしろそのような制限が長くつづいたために、それに見合う能力を失って、強制そのものによって生じた状態よりも、強制の廃止によって生じた状態のほうがずっと不幸におもえるほど、人間が衰弱するということはありうることだ。

Diese Betrachtungen sind ohne Zweifel von der Regierung *in Erwägung*

gezogen worden (...) (508)

これらの見解は疑いなく政府によって考察されていた (……)。

この記事を書いた動機は、1807年10月9日にシュタイン男爵指導のもとおこなわれた農奴制の廃止にあったらしい。この廃止を急速にはなく徐々にすすめるべきだ、というのが執筆者クライストの見解なのであるが、今はそれは措くことにしよう。

まず最初の例の冒頭には、*„Jede Beschränkung der Freiheit“* という名詞化がみられる。これは補足語としての名詞化の典型であるといってよい。政府の政策に関する記事であるから、クライストもかなり気を配ったのではないだろうか。民衆の「自由の制限」は政治にとって微妙な問題であるにちがいない。検閲のきびしかった当時であってはなおさらのことである。政府を刺激することなく、この問題をいかに表現するかはジャーナリストの腕のみせどころであるが、クライストはこれを巧みに名詞文体によって表現している。つまり、「誰が」自由を制限するのかという主体を省略することで、情報の非個人化が達成されているのである。このことはそれにつづく *„der Beschränkte“* にもあてはまる。

つぎの例では名詞化に前置詞をともなった *„durch Aufhebung des Zwanges“* という前置詞句がみられる。この句は理由をあらわす接続詞 *„weil“* で書きかえることができる。さきほどの例と同様に、ここでも名詞文体を採用することで情報の非個人化が達成されていて、客観的に記事を書こうとするクライストの意図がうかがわれる。

最後の例には機能動詞結合がみられる。4.4で機能動詞結合の例を詳細にみるが、この例で重要なのは、機能動詞結合によって陳述の重点が変化しているということである。動詞文体による能動態でこの文例と同じ内容のものを書けば、おそらく「政府」(Regierung)が陳述の中心となるだろう。しかし、引用においては機能動詞結合を採用することで「これらの見解」が陳述の重心と

なり、執筆者にとっては政府ではなく、あくまで「これらの見解」がテーマであることが強調されることになる。

4. 2 「別の新聞からとった政治的事件」

Deutscher Klassiker Verlag 版全集 (DKV) には「別の新聞からとった政治的事件」(Aus anderen Blättern übernommene politische Nachrichten) という項目がみられる。ここにみられる記事はクライストの完全なオリジナルというわけではなく、彼が別の新聞の記事を編集したものである。主として無署名で執筆されたこれらの記事は、最初は „Miscellen“ という見出しのもとに、そして 45 号 (1810 年 11 月 21 日) 以降は „Bulletin der öffentlichen Blätter“ という見出しのもとに発表されたものである。

これらの記事が興味ぶかいのは、その内容が当時の状況を知る貴重なドキュメントであるだけでなく、クライストの文体を浮き彫りにしてくれるからでもある。「別の新聞からとった政治的事件」では、クライストが「別の新聞」からの記事に手を加えるというのが基本的な手続きとなっている。したがって、クライストの文章とオリジナルのそれを比較することで、彼のスタイルの一端を垣間見ることができるようにおもわれる。

ここで取りあげるのは、「ベルリント刊新聞」第 57 号 (1810 年 12 月 5 日) に掲載されたごく短い記事である。これは 1810 年 11 月 21 日の「スイス共同通信」(Gemeinnützige Schweizerische Nachrichten) をもとにしたものである。ごく短いものでありながら、クライストの編集者としての手腕がここでは発揮されている。この記事は数行なので全文をあげておこう。まずはスイス共同通信のオリジナルから。

Da der Verfasser dieses Blatts, bestimmt erhaltener Weisung zuwider, einen Artikel von Bellenz, den Kanton Tessin betreffend, in das gestrige Blatt eingerückt hat, so ist er auf hohen Befehl mit Gefangenschaft bestraft

worden. (1200)

この雑誌の編集者は、たしかにあたえられた指示に反して、テッシーン州に関係するベレンツの記事を昨日掲載したので、命令に従って禁固の刑に処せられた。

つぎにクライストによって編集された記事をあげる。

Der Herausgeber der Schweizerischen Nachrichten, *ist wegen Einrückung eines Artikels von Belenz, den Kanton Tessin betreffend* (der ihm untersagt war) *in Gefangenschaft gesetzt worden.* (614)

スイス通信の編集者は、テッシーン州に関係するベレンツの記事を掲載したかどで（これは禁じられていた）、禁固に処せられた。

オリジナルとクライストによって書きかえられたものを比較して際だつのは、なによりも前者より後者の方が短いということである。じっさい、オリジナルは33語、クライストの文章は24語からなっている。文構造の点からみると、前者は一個の副文と一個の主文からなる従属的複合文であり、後者は括弧により関係代名詞節が挿入されているものの基本的には単一文であるといつてよい。内容的には両者はほぼ同じといつてもよく、禁じられていたベレンツに関する記事を掲載したためにスイス通信の編集者が逮捕された、というものである。前者ではその逮捕の原因が「[主文に先行する]原因・理由を表す副文を導く」(小学館『独和大辞典』) 接続詞 *da* によって表現されているのにたいして、後者では *einrücken* が名詞化され、それが理由をしめす前置詞 *wegen* と共にもちいられることで名詞文体を構成している。つまり、副文の代わりとしての名詞文体が、ここでは文の短縮をうむ要因となっている。また、クライストの記事では *in Gefangenschaft setzen* という機能動詞結合がもちいられていることも指摘しておこう。限られた空間に最大限の情報を盛りこむのがジャーナ

リズムの言語の基本であるが、ごく短い記事でさえもさらに凝縮し、効率的に情報を提供しようとするクライストの編集者としての態度が、この書きかえにあらわれているといえよう。

4. 3 副文の代わりにもちいられる名詞文体

4. 1 および 4. 2 において、われわれは二つの記事を手がかりにしてクライストの名詞文体に接近した。そしていずれの記事にも副文の代用としての名詞文体を確認することができた。じっさい、この用法は「ベルリント刊新聞」において頻出し、しかもその機能は多岐にわたっている。そこで以下ではそれらの中から若干を抜粋し、分析してみたい。

4. 3. 1 時間をあらわす副文の代用

*Beim Nachmessen eines halben Haufens Torf, den Schullehrer Krüger gekauft hatte, fehlten 12 Kiepen ...*¹⁹⁾

クリューガー先生が買っていた泥炭の山の半分が量りなおされたとき、12袋足りなかった(……)。

いうまでもなく、ここでは文頭の ‚Beim Nachmessen eines halben Haufens Torf‘ が副文に書きかえることのできる前置詞句である。「時点・継続的時間」をしめす前置詞 ‚bei‘ にともなわれた前置詞句は、 ‚Als ein halber Haufen Torf ... nachgemessen wurde ...‘ というように、従属接続詞 ‚als‘ に導かれる従属文でも表現できたことであろう。しかるに、ここでは ‚bei‘ が使用されることにより、凝縮された文体が成立している。すでにふれたように、名詞文体にあってはブロック構成がおおきな役割を果たすが、ここでも属格 ‚eines halben Haufens Torf‘ が付加されている。書きかえた文からもあきらかなように、この属格は主語属格として機能している。一般にブロック構成は情報の凝縮を可能にするので、読者の負担を軽減するといわれる。しかし、ブロック構成があ

まりにもおおくの名詞によって構成されると逆に読者に負担を強いることになる。この意味で、クライストのブロック構成はきわめて簡潔であるといえる。クライストは、ブロック構成を効果的に使用し、読者に最低限必要な情報を効率的に提供しようとするのである。

ところで、時をあらわすのはなにも同時性だけではない。

Auf dem Markte ist einem fremden Müller eine abgenutzte Metze zerschlagen und eine ungestempelte *nach Erlegung von 2 Rthlr. Strafe* ²¹⁾ konfisziert.

市場で見知らぬ粉屋の使い古されたはかりが割られて、2ライヒスターラーの罰金を支払ったあと、刻印の押されていないのが差し押さえられた。

ここでは後時性をあらわす前置詞 ‚nach‘ による表現がみられる。これは従属接続詞 ‚nachdem‘ に導かれる副文に書きかえることができる。„(...) nachdem ihm 2 Rthlr. Strafe auferlegt worden waren“。ここにみられる前置詞句もやはり簡潔なブロック構成をなしていることに注意したい。

4. 3. 2 因果関係をあらわす副文の代用

4. 2でも確認することができたが、因果関係をあらわす例を今一度あげておこう。

Auf dem Abendmarkt sind 4 fremde nicht richtige Maße zerschlagen, und einem Butterhändler, *wegen ungetreuen Abwägens*, 50 1/2 Pfd. Butter konfisziert worden. (622)

夜の市場で、海外の正確でないはかりが四つ割られた。そして、不誠実な計量のかどで、バター商人から50と2分の1ポンドのバターが押収された。

Der Hausknecht Dieme, im Dienst des Kaufmann Grebin, ist *wegen zu schnellen²²⁾ Fahrens* auf der Straße verhaftet.

下僕ディーメは、商人グレービンの使いをした際、路上で速度を出しすぎたかどで逮捕された。

ここでは動詞 ‚abwiegen‘ ‚fahren‘ がそれぞれ名詞化されており、理由をあらわす前置詞 ‚wegen‘ と共にもちいられている。前者は „(...), und einem Butterhändler 50 1/2 Pfd. Butter konfisziert worden, weil er ungetreu abgewogen hatte“ と、後者は „Der Hausknecht Dieme ... ist auf der Straße verhaftet, weil er zu schnell gefahren war“ というように、これらはいずれも「原因・理由」をあらわす従属接続詞 ‚weil‘ によって書きかえることができよう。また、ジャーナリズムの文体にふさわしく、前者は二つの主文が並列接続詞 ‚und‘ で結合されている対結文、後者は一つの主文からなる単一文で構成されており、センテンスとしてもきわめて平易な構造となっている。さらにブロック構成に関していえば、前者が一つの形容詞、後者が一音節の副詞と形容詞によって簡潔に構成されていて、凝縮された情報の理解を容易にしているのも注意をひく。

4. 3. 3 制限文の代用

また、名詞化をともなった前置詞句が、「主文の叙述にたいする主観的譲歩 (soviel, soweit) あるいはその非有効範囲を (außer daß, außer wenn ...) 23) 23) 23) あらわす」制限文の代用となることもある。

Der Ballon des Hrn. Claudius soll, *nach der Aussage eines Reisenden*, in Düben niedergekommen sein. (599)

ある旅行者の証言によると、クラウディウス氏の気球は、デューベンで下降したそうである。

クライストは、当時の流行に便乗して飛行船に関する記事をいくつか執筆しているが、引用もそれらのうちのひとつである。クリスチアン・フリードリヒ・クラウディオスという無名の気球乗りを追いかけた一連の記事の中に、„Neueste Nachricht“と題するこの短い文章がみられる。一見してわかるように、これも単一文である。ここでは動詞 ‚aussagen‘ の名詞化と「判断の根拠」をあらわす前置詞 ‚nach‘ からなる前置詞句が制限文の代用となっている。この句を文に書きかえればつぎのようになるだろう。„Der Ballon des Hrn. Claudius soll in Düben niedergekommen sein, wie ein Reisender aussagt“。この例においてもやはりブロック構成はきわめて単純で、主語属格が名詞を修飾するのみである。

もう一例あげておこう。

Um alle uns bis jetzt bekannt gewordene Wünsche des Publikums *in Hinsicht der Austeilung der Berliner Abendblätter* (下線はオリジナルではイタリック) zu befriedigen, sind folgende Veranstaltungen getroffen worden.
(652)

ベルリント刊新聞の頒布に関して、これまでわれわれにあきらかになった読者諸氏のあらゆる希望を満たすために、つぎのような措置がとられた。

引用は「ベルリント刊新聞」第5号(1810年10月5日)の付録におさめられた「読者諸氏に」(An das Publikum)からとったものである。動詞 ‚hinsehen‘ の名詞化が前置詞句 ‚in‘ と結びつき、制限文の代用として機能している。この前置詞句は、„was die Austeilung der Berliner Abendblätter betrifft“ のように書きかえることができる。ただ、注意したいのは、この用法が現代のドイツ語とは若干異なるということである。‚in Hinsicht auf et‘ (小学館『独和大辞典』)というように、現代では前置詞句をブロック構成の要素とするのがふつうであろう。

4. 3. 4 付帯状況

さらに動詞の名詞化によって付帯状況が表現されることがある。

Wer die Abendblätter jeden Abend ins Haus geschickt verlangt, kann sich, er möge abonniert haben wo er wolle, *unter Vorzeigung seiner Abonnements-Quittung*, an Herrn Buchalsky in der Fischer-Straße Nr. 13 wenden, (...).

(下線はオリジナルではイタリック) (652)

夕刊新聞を毎晩自宅に配達されるのを希望する方は、予約購読の場所がどこであろうと、その予約領収書を提示のうえ、フィッシャー街13番地のブハルスキイ氏に願いでることができます(……)。

「条件・状況」をあらわす前置詞 ‚unter‘ が、動詞 ‚vorzeigen‘ の名詞化と結合し付帯状況をあらわしている。この例でもやはり単純なブロック構成が目をはく。属格による補足がおこなわれているが、ここではこれまでの例とは異なり目的語属格となっている。この前置詞句も以下のように書きかえることができよう。„wobei er seine Abonnements-Quittung vorzeige“。挿入(Parenthese)はクライストの小説作品においてしばしばみられる修辭的技巧であるが、ここでも名詞化をともなう前置詞句が挿入されている点に注意したい。これにより「予約領収書を提示のうえ」という意味が強調されることになる。晩年のクライストは経済的困窮に陥っていたという。さきに例示した「読者諸氏に」においても購読者を増やそうと腐心するクライストの姿が垣間みられたが、「予約領収書」の提示を強調するこの文体からも当時のクライストの姿がかすかに浮かんでくるようである。

4. 4 機能動詞結合

ここまで、前置詞句による副文の代用のおもな用法を概観してきた。そこで、最後に機能動詞結合の例を一瞥しておきたい。副文の代用としての用法と並ん

で、「ベルリント刊新聞」では、機能動詞結合もしばしば使用されている。機能動詞とは「本来の意味を著しくあるいは完全に失い、主としてあるいはもっぱら文法的・統語的機能のみを遂行する動詞²⁴⁾」のことをさす。つまり、「動詞が文の陳述内容の意味の担い手としてはあまり機能していない」性質をもつのが機能動詞結合であるといえる。この構文においては、動詞の意味が希薄になるために、意味の重心が動詞以外の要素、とりわけ前置詞句や対格目的語に移行することになる。したがって、機能動詞による表現も名詞的表現のひとつであるといえる。

Mehrere Generale und höhere Offiziere sind im Österreichischen vor ein Spezial-Kriegsgericht gezogen worden, um wegen ihres Verhaltens, während des Kriegs, Rechenschaft abzulegen. Man sagt, die Akten werden *zur Kenntnis des Publikums gebracht werden.* (612)

おおくの将官、高位の士官がオーストリアで特別軍事裁判に処された。というのも、彼らの戦争中の振るまいゆえに釈明するためである。聞くところによると、行為の数々は国民に伝えられたということである。

1809年のオーストリア＝フランス戦争を思い起こさせるこの記事にも機能動詞結合がみられる。動詞 ‚kennen‘ に由来する名詞 ‚Kenntnis‘ にあつては、複数の機能動詞結合が可能であるが、ここではジャーナリズムの言語にふさわしく堅い文書語である ‚zur Kenntnis bringen‘ が採用されている。機能動詞結合の利点は、たんに名詞化によって表現が単純化するという点だけではない。たとえば、機能動詞結合はアスペクトにも影響を与えることができる。例文でもやはり動作相の変化がみられるといえよう。つまり、機能動詞結合をもちいることで、軍人による行為の数々が国民に知らされたその瞬間ではなく、それを国民に知らせるに至る過程をも包含することになるのである。換言すれば、この構文を使用することによって、出来事を点ではなく線としてとらえること

が可能となる。²⁵⁾さらに付け加えておかなければならないのは、陳述の重点の変化である。もしも引用の機能動詞結合による文が動詞文体で表現されたとすれば、情報の重点はおそらく「誰が」国民に軍人の行為を伝達したのかという点におかれるであろう。しかるにここでは機能動詞結合によって「行為」そのものを強調することが可能となるのである。

つぎの例をみてみよう。

Dann gab er seinen Helfershelfern die nötigen Nachrichten, verabredete Zeit und Ort, *setzte* die Bewohner, sobald der Brand sich zeigte, durch lautes Geschrei *in Verwirrung*, (...). (621)

それから彼は共犯者たちに必要な情報、すなわち、取り決められた時間と場所を伝え、居住者たちを、火事がみられるやいなや、大きな叫び声で混乱におとしいれた(……)。

「ベルリン夕刊新聞」第7号(1810年10月8日)の付録として発表された「犯罪者シュヴァルツと放火犯の一味について」(Etwas über den Delinquenten Schwarz und die Mordbrenner-Bande)からの抜粋。逮捕されたシュヴァルツ氏が、じつは放火犯の一味だったというのがこの記事の内容である。この例文は動詞 ‚verwirren‘ではなく、その名詞化 ‚Verwirrung‘が前置詞 ‚in‘と結合して機能動詞 ‚setzen‘と共にもちいられている。この例は動詞文体であろうと機能動詞結合であろうと、陳述の重点は主語の ‚er‘におかれるであろう。ただしここでは機能動詞が「動作様態」(Aktionsart)に及ぼす影響を考慮しなければならない。²⁶⁾すなわち、ここでは機能動詞 ‚setzen‘が前置詞句 ‚in Verwirrung‘と結びつくことで、出来事の「開始」が含意されることになる。

5. む す び

詩的言語など存在しない。作家の想像力の産物である文学的テキストであろうと、客観性にもとづくジャーナリズムのそれであろうと、やはりおなじ言語によって書かれているのだ、という見方がある。ともに言語を素材としてもちいるという意味では、おそらくそのとおりであろう。しかし、文学的テキストとジャーナリズムのそれとのあいだには相違もまたあるにちがいない。たとえば、ノンフィクションの言語とフィクションの言語は、現実という指示物 (referent) の観点からすれば機能的に一線を画する。そして、それぞれが対象とする読者層も異なるであろう。

ジャーナリズムの言語は本質的な制約をともなう。たとえば、新聞は原則として事実を過不足なく、しかも不特定の読者にむけて、限られた紙面で伝達しなければならない。クライストはそれを効果的におこなうための手段のひとつとして名詞文体を使用した。名詞文体は現代ドイツ語の傾向を象徴するが、リユールも指摘するように、クライストの名詞文体の構造は、すくなくとも副文の代用において使用される前置詞に関していえば、現代のそれときわめて類似しているといえる。²⁷⁾

だが、クライストの名詞文体と現代ドイツ語の名詞文体とのあいだには相違もまたみられる。そのひとつがブロック構成の性質である。エガースは現代ドイツ語では多数の語彙からなるブロック構成がおおく存在することを指摘し、つぎのような例をあげている。「受容的な (……) 言語能力の分野での言語教育の能率化に向かつての強化された努力への促し」(Anstoß zu einem verstärkten Bemühen um Effektivierung des Sprachunterrichts im Bereich rezeptiven (...) Sprachkönnens)²⁸⁾。この名詞句を一読して理解するのは困難をともなうのではないだろうか。それにたいして、小論で考察した限りでは、何度も強調したように、クライストの名詞文体のブロック構成は、ひとつの補足語から構成されるものがおおくきわめて平易であった。「不正確なあるいは理解のできない名詞

化はさげなさい²⁹⁾」というのは、ドイツ語で作文をするときの戒めであるが、この意味で、ジャーナリストとしてのクライストは読者の理解を妨げることをない書き手であったといえるのではないだろうか。長文で難解な動詞文体で知られるこの作家は、情報を凝縮し、簡潔に提示する名詞文体のすぐれた書き手でもあったのである。

本稿においては「ベルリント刊新聞」を中心としたため、クライストの小説における名詞文体の効果を考察するにはいたらなかった。クライストの短編は、その冒頭にみられる具体的な状況設定ゆえに客観的な印象をあたえる。だが、そのような設定だけが客観的な印象をひきおこす要因ではないのではないか。それにくわえて、小説がいかなる文体で語られているのかという点をも考察しなければならないであろう。クライストの読者がいまだくあの客観的な印象には、ひょっとすると名詞文体が関係しているのかもしれない。この問題については他日を期することにした。

註

- 1) 本稿は2004年に京都大学に提出された課程博士論文『ハインリヒ・フォン・クライストの文体—文体論からのアプローチ』の第2部第2章「クライストの名詞文体について—「ベルリント刊新聞」を中心に—」を加筆修正したものである。
- 2) たとえば、A・ランゲンはつぎのようにいっている。「平均して長く、しばしば非常に包括的な文の枠の中に(……)すべてが割りこんでいる。すなわち、一次、二次、三次の副文が。その結果、文の弧はしばしば極限にまで張りつめられて、強度の分裂の支配下にあるのである」。Langen (1987: Sp. 1284)
- 3) Eggers (1973: 71f.) 引用頁は翻訳による。以下翻訳のあるものはその頁を記す。
- 4) クライストにおける名詞文体のより広範な機能分類とその現代ドイツ語との関係についてはLühr (1991)を参照されたい。リユールもドイツ語学の立場から本稿と同様に副文の代理としての名詞文体に着目し、それを詳細に分類している。本稿ではできるだけリユールの文例と重複しないようにしたが、同じ例を使用した箇所もある。とりわけ機能分類と文例の書き換えに関してはおおいに参考にさせていただいた。記して謝意を表す。ただし、リユールの論考は名詞文体の機能的側面の記述に重きを置いているが、本稿はそれに加えて読者に与える文体的効果にも言及しているという点で、分析の力点が異なっている。

- 5) ジャーナリストとしてのクライストについての詳細は Aretz (1984) を参照されたい。
- 6) 「ゲルマニア」の成立に影響を与えた歴史的出来事については Aretz (1984: 68-79) を参照されたい。
- 7) Einleitung [der Zeitschrift Germania] を参照されたい。In: Sämtliche Werke und Briefe, hrsg. von Ilse-Marie Barth, Klaus Müller-Salget, Stefan Ormanns und Hinrich C. Seeba, Frankfurt am Main. 1987-97. Bd. 3. S. 492f. (以下 DKV)
- 8) Lüger (1995: 22ff.) を参照されたい。
- 9) Lüger (1995: 25f.), Braun (1998: 116ff.) を参照されたい。
- 10) 以下の分類については Eggers (1973: 60ff.), Lüger (1995: 24) を参照されたい。
- 11) Eggers (1973: 64), Lüger (1995: 24)
- 12) Lüger (1995: 25)
- 13) これらの分類は Heringer (1989: 301) による。
- 14) ブロック構成の詳細については Eggers (1973: 72ff.) を参照されたい。
- 15) Heringer (1989: 309)
- 16) Sämtliche Werke und Briefe, hrsg. von H. Sembdner. München 1993. S. 945f.
- 17) 以下、引用はとくにことわらないかぎり DKV 版により、頁数は括弧で示す。
なおオトリックによる強調は引用者による。以下同じ。
- 18) 引用の翻訳は『クライスト全集 第一巻』（佐藤恵三訳）を適宜参照させていた
だいた。記して謝意を表する。
- 19) Heinrich von Kleist, Berliner Abendblätter. Nachwort und Quellenregister von
H. Sembdner. Darmstadt 1965. S. 22. (以下 BA)
- 20) ヘルビヒ / ブッシャも前置詞 *bei* の項目で名詞文体に関連してつぎのように定
義し、例文をあげている。「時間。同時性。時点。時間的拡がり。特に動詞派生名
詞の前」。Beim Eintritt des Dozenten wurde es still. (=Als der Dozent eintrat)
Helbig / Buscha (1977: 470) さらに „Ein Kaufmann ist gestern abend *bei*
Verlassung des Schauspielhauses in dessen Nähe mit zwei Töchtern und zwei Enkeln
unter einen Wagen gerathen ...“ (BA. S. 198) も一例としてあげることができよう。
- 21) BA (1965: 50)
- 22) BA (1965: 22)
- 23) Helbig / Buscha (1977: 731)
- 24) Helbig / Buscha (1977: 91)
- 25) Eggers (1973: 105)
- 26) ハラルト・ヴァインリヒは機能動詞を「開始」と「継続」といった動作様態に
よっても分類している。Weinrich (2003: 1056) また、ヘルビヒ / ブッシャもつぎ

のようにいつている。「機能動詞構造を用いて、対応する本動詞の動作相を変えたり、あるいは動作相に様々な変化を付け加えることができる」。Helbig / Buscha (1977: 98)

27) Lühr (1991: 156) を参照のこと。リユールはしかし現代ドイツ語との類似点だけでなく相違点にも言及している。「ベルリント刊新聞」の名詞文体にみられる前置詞は現代ドイツ語と変わるところがないが、それと結びつく名詞の形式が異なる、とリユールは指摘している。

28) Eggers (1973: 76)

29) Heringer (1995: 242)

文献一覧

一次資料

Kleist, Heinrich von (1987/97): Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. von Ilse-Marie Barth, Klaus Müller-Salget, Stefan Ormanns und Hinrich C. Seeba, 4 Bde. Frankfurt am Main.

Kleist, Heinrich von (1993): Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. von Helmut Sembdner, 2 Bde., 9., vermehrte und revidierte Auflage. München.

Kleist, Heinrich von (1965): Berliner Abendblätter. Nachwort und Quellenregister von H. Sembdner. Darmstadt.

ハインリヒ・フォン・クライスト『クライスト全集 第一巻』（佐藤恵三訳）、沖積舎、1998年。

二次資料

Aretz, H. (1984): Heinrich von Kleist als Journalist. Untersuchungen zum ‚Phöbus‘, zur ‚Germania‘ und den ‚Berliner Abendblättern‘. Stuttgart.

Braun, P. (1998): Tendenzen in der deutschen Gegenwartssprache. Sprachvarietäten. 4. Auflage. Stuttgart / Berlin / Köln.

Eggers, H. (1973): Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert. München. 〈岩崎英二郎（訳）（1975）『二十世紀のドイツ語』白水社〉

Helbig, G / J. Buscha (1977): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 4., durchgesehene Auflage. Leipzig. 〈在間進（訳）（1982）『現代ドイツ文法』三修社〉

Heringer, H. J. (1989): Lesen lehren lernen: Eine rezeptive Grammatik des Deutschen. Tübingen.

Langen, A. (1987): Deutsche Sprachgeschichte vom Barock bis zur Gegenwart. In: W.

- Stammler (Hrsg.): Deutsche Philologie im Aufriß. Bd. 1. Berlin.
- Lüger, H-H. (1995): Pressesprache. 2., neu bearbeitete Auflage. Tübingen.
- Lühr, R. (1991): Kondensierte Strukturen. Nominalstil in den informierenden Textorten der von H. von Kleist herausgegebenen »Berliner Abendblätter« - Nominalstil in der Gegenwartssprache. In: Muttersprache: Zeitschrift zur Pflege und Erforschung der deutschen Sprache. S. 145-156.

(本学任期制助手)
(2006年3月15日受理)